©広川智基
Courtesy of YAMAMOTO GENDAI

©Shinya Nagatome
Courtesy of YAMAMOTO GENDAI

美術作家

村山 留里子

●むらやま・るりこ
1968年生まれ。秋田市在住。10代後半から独学で染色を始め、2001年「オプ・トランス!」(KPOキリンプラザ大阪)で自ら鮮やかに染め上げた無数の生地を縫い合わせた大作を出品し注目を浴びる。2002年からはビーズ、造花、アクセサリー、人形などを即興的に組み合わせたシリーズ「奇麗の塊」を発表。以降、国内外での展覧会のみならず、コム・デ・ギャルソン、プラダ、ロエベなどとのコラボレーションも多数。2013年12月からは、過去の作品から新作までを幅広く網羅した個展「果てしなく近い楽園」(秋田県立美術館)が開催された。

宝物

昨年(2013年)の12月21日~2月2日まで秋田市のエリアなかいちにある秋田県立美術館にて村山留里子展「果てしなく近い楽園」が開催されました。たくさんの人たちとのご縁でアートの世界に出会い、活動を続けてくることができた15年間。個展会場には私の履歴書なるものが展示されていて振り返るのはまだ早い気もしましたが、いろいろ思い返すことができました。

東京から秋田に戻ってからこれまで、現在所属している東京の「山本現代」というギャラリーと住まいの近くにある秋田市大町の「ココラボラトリー」というギャラリー、この2つの存在によって、私は美術作家としてうまくバランスをとることができ、今までやってこれたのだと実感しています。

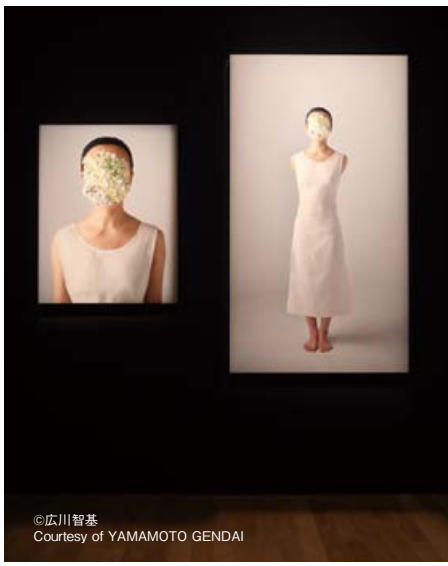
ココラボラトリー代表である笹尾千草さんとの出会いは体調を崩して地元に戻った私に作家としての次の段階を想像させてくれる秋田で唯一のモノでした。彼女とは作家活動を続けていくためによくお話をしました。しんどいとき、喜びあふれるとき、テンションの高い私の気持ちをよく受け止めてくれたと思います。今書いていても涙がでてきてしまうほどすべてが鮮明です。

真摯に作品を作り続けることは孤独な作業でありますが、笹尾さんをはじめ、それをサポートしてくださる方々とは、男女や親子関係とはまた違った特別な信頼関係を持つことができます。「縁」とはかけがえのないモノです。意図してはなかなか出会えないけれど、ある日突然やってくる、そんな宝物のような方々に秋田に戻って出会うことができました。

今回寄稿を綴るにあたり編集担当の方から「特に思い入れのある作品はありますか」と質問され、私は「Visible」という写真作品をあげました。「Visible」とは「目にみえる」「見てわかる」という意味ですが、そこには可視化(直接「見る」ことのできない現象、事象、関係性を「見る」)ということも含んでいます。無防備でなんの疑いもなく見て認識していることが実は全く見えていなくて、すり込まれているのではないだろうか…「見えない状態の方が見えている」マスクをつけて視野を塞がれている女性がそんな問いかけをしています。

これからの時代さまざまなことが従来通りにはいかないと思います。厳しくなっていくでしょう。今回の個展「果てしなく近い楽園」は、今まで関わったすべての人たちの思いに感謝することができたよい区切りとなるものでした。

ハレの日々が続いた展覧会が終了して約2カ月が経ちました。日常が私にリズムを与え、心身やライフスタイルをシンプルな形に戻してくれています。そんな中、日々を生きるために欠かせない「食」はとても重要です。秋田の豊かな「食」に感謝し、助けられながらこれからもぶれずに私らしく愛を持って生きていきたいと思っています。



©広川智基
Courtesy of YAMAMOTO GENDAI